

タイトル



甘く危険な新性活
くボク(♂)をボク(♀)と
して可愛がる女達く

目次

序章【新しい生活】	久瀬家の未亡人と娘達
一章【新しい経験】	可愛い母の誘い
二章【新しい快感】	女子大生の幻惑
三章【新しい恋人】	女子高生の歪愛
四章【新しい姦係】	男の娘に喰われる女達

タイトル

序章【新しい生活】	久瀬家の未亡人と娘達
-----------	------------

七分咲きのソメイヨシノが、淡い紅を含んだ花卉をはらりと零した。
四月の朝日を浴びた春の欠片が、齋美市立高校の制服に身を包んだ男子生徒の肩に
ふわりと舞い落ちる。

（昨日挨拶に来た時は夜だからわからなかったけど……改めて見ると、凄（こわ）い迫力）
そんな四季の風流に気付くことなく、男子生徒——齋美市立高校二年生である
如月薫は、二車線道路に沿って聳え立つ重厚な石塀に目を奪われていた。

路面のアスファルトとは異なり、風に削られ雨に穿たれた岩肌は累月のくすみで染
められており、戦火の傷跡か焦げらしきものが散見している。石と石の境目にはこん
もりと苔が盛られており、古色蒼然とした相を作りあげていた。

(こんなお屋敷に住む人が母さんの親友なんて、どうにも実感が無い)
太平洋戦争前まで、この辺り一帯を仕切っていた久瀬家——その大地主の家系に連なる未亡人こそ、薫が一人暮らしを始める新居のオーナーだ。

語学に堪能な商社勤めの父が、前任者の横死によって急遽ブラジルに飛ぶと決まったのは、ほんの数ヶ月前の話だ。仕事はできるが自活能力に疎い父のため、母も付き添うことになったのだが、薫としては念願叶って入った進学校を辞めるつもりはない。樂觀主義の父とは対照的に現実主義の母は一人息子の意を汲み、日本へ残ることを許してくれた。ただし、母のシビアな経済観点から家族が暮らしていたマンションは一人暮らしに過分な環境であるとして解約されてしまう。

その際、母から事情を聞き及び一人暮らし用の住居を提供してくれたのが、この久瀬家の主であった。

(来るのは二回目だけれど、やっぱりドキドキする)

昨夜は引越しの挨拶をしに伺ったところ、ついでに夕食にまで招かれてしまった薫だが、家の外観を目にするだけで否応なく緊張してしまう。

タイトル

数十メートルは続く石塀に沿って歩いてみると、やがて防犯カメラを備えた真新しくも荘厳な数寄屋門が見えてきた。好意的に言えば由緒正しい旅館の正門。忌憚なく

述べれば任侠映画を彷彿とさせる格式張った門構えなだけに、一般庶民としてはどうにも萎縮してしまう。インターホンの前に立つと、薫は軽く呼吸を整えた。

「あらあ、薫君。おはよう」

いざインターホンを鳴らそうとした刹那、内側から門扉がゆっくりと開いた。春のささやかな陽気に融和するおっとりした声と共に、妙齢の女性がふわりと姿を現す。

母の親友にして大家——久瀬沙苗さなえとの不意打ちに等しい対面に、薫は声を失う。

(単にいきなり出てきたから驚いただけじゃないのは、自分でもわかっている)

薫が動揺したのは一驚に由来するものではなく、寧ろ何度見ても慣れない戸惑いに起因していた。

沙苗は薫の母の旧友だ。年齢も同じく三十八歳だと聞いていたが、何処をどう見ても三十路も暮れにさしかかった年増には見えない。

(どう穿った見方をして、二十代後半くらい……なんだよね)

改めて、薫は瑞々しさに溢れた熟女を見つめる。若々しい印象を決定づけているのは、ぱっちりとした双眸だろう。漆黒の瞳は幼児のようにつぶらで大きく、繊細な睫によって可愛らしく彩られている。

なだらかに引かれた鼻梁と透明感のある小さな唇。スキンケアしか意識していない

ような薄いメイクが、余計に外見年齢を低下させていた。

艶やかな栗色の髪はシニヨンに纏められ、雪肌のうなじとの対比が目眩しい。

(多分、童顔だから若く見えるんだろうけれど)

顔付きが幼いのなら身体もそれに追従するのかもしれない、これがまるで違う。

165センチを超える薫より頭一個分ほど低い身長は、確かに女性としては小柄かもしれないが、スタイルは生半可な成人女性では及びもしないほどに優れている。

淡い桃色のケープを羽織った白いワンピースは、円熟した双丘によって押しあげられ、乳房の直下に大きな空間を作りあげている。背丈こそ低めだが蜂腰は高く、魅惑の媚臀がスカートに悩ましい曲線を描いているのが見て取れた。

膝丈までワンピースで隠れているが白いふくらはぎがなだらかな全景を魅せ、小薄茶色のサンダルからはショートソックスに透ける小さな足指が見えた。

(これで子供がいるのが、ますます信じられない)

実年齢より一回り若く見えるのは、単に沙苗の顔立ちが幼いからだけではないだろう。薫の母に見られる年相応の威厳や冷静さが、ふわふわとした雰囲気醸し出す沙苗からは微塵も感じられない。

それにもかかわらず、沙苗は二人の娘を持つ立派な母親なのだ。おまけに二人とも

タイトル

歩くのも覚束ない稚児ではなく、薫よりも年上ときている。

その風貌と実態が乖離した違和感が、沙苗に対して形容しがたい躊躇を惹起させた。

「薫君？」

「お——おはようございます。沙苗さん」

その場で固まっていた薫を不思議に思ったのか。小首を傾げた沙苗がまっすぐに双眸を覗き込んできた。お世辞にも潔白とは言えない心中を覚られまいと、薫は慌てて背筋を直し、一礼する。

相手が親友の息子ということもあってか、沙苗は顔合わせをした際に大家と呼ぶことを厭い、名前で呼ぶよう求めた。薫が頼みを聞いてくれるのが嬉しかったのか、幼顔の熟女はにこりと微笑む。

「新しいお家はどうかしら。初日だけれど、よく眠れた？」

「はい。とても静かで、慣れ親しんだ前の家よりもぐっすりと眠れたくらいです」

世辞でも何でも無く、築五年にも満たない新居は実に快適な睡眠を提供してくれた。

元来、一人暮らしの女性を主な顧客とし、プライベートの遵守をセールスポイントに掲げた沙苗のマンションは静音性に極めて優れている。

入居者は楽器演奏も可能らしいので、隣人がどれだけ大声を出していても自室の静

謚は常に確保されている。おかげで、実に快適な眠りにつくことができた。

「良かったあ。薫君は、圭子ちゃんから預かった大切な男の子だもの。私、昨日心配で中々寝付けなかったの」

心底安心したとばかりに沙苗は圭子——薫の母の名と共に、心の底から無用となった懸念を搾り出し、目尻をふやかせた。

(……前言、撤回しなくちやいけないかな)

沙苗は熟女には到底見えない若さに溢れ、母親であると思像するのが困難だ。

それでも、この笑顔には独身の女では醸し出せない、慈しみに満ちた母性を感じられる。不意に胸中からむず痒い衝動が込みあげ、春の陽気だけでは説明の付かない火照りに頬が炙られる。

「薫君は、あの子と待ち合わせ？」

「はい。本当は五分くらい後なんですけれど、ちよつと早めに起きたので——」

沙苗から見つめられるのが気恥ずかしくなり、薫は宛てもなく視点を彷徨させた。

(……なんだろう、この音)

諦めて沙苗に正対しようとした矢先、ふと久瀬家の裏から鈍い唸りが響いてくる。

低く浸透する鳴動はやがて石塀を回り込むと、鋼鉄の塊と化して姿を現した。

二車線しか無い閑静な住宅街に突如として出現した深紅のロードスターが、交通法を完全にぶつちぎる加速で接近して来る。本能的な危機を感じ、薫は慌てて数寄屋門に背を貼り付けた。

凶悪なスポーツカーはそのまま疾走していくのかと思いきや、急激な減速をかけびたりと沙苗の前に横付けされる。慣性が完全に消え去らず、車体が停車しきるよりも早く、ソフトトップの無いオープンカーのドアが開いた。

「やっぱり薫君だ。おはよう」

ドライブサングラスをかけた若い女性が、静かな笑顔を零す。

聞き覚えのある声質で相手の正体を把握した薫は、門に背を接させたまま「おはよう、ございます」と顔を引き攀らせた。

偏光レンズに透ける双眸が蕩けるように緩んだ。織指がキャスケット帽に引っかけられ、ミディアムヘアの黒髪がふわりと春の陽気を孕む。

(沙苗さんは可愛らしい女性だけれど、この人は凄く綺麗だ)

久瀬菜央美——それが、久瀬家の長女の名だ。

沙苗の娘というだけあって、菜央美は文句のつけようがない美人だ。三十八歳には見えないふわふわと柔らかな雰囲気醸し出す母親とは対照的に、十九歳の女子大生

は伶俐な麗しさを纏っている。

高貴な猫を思わせる切れ長の瞳に、美しく揃えられた柳眉。紅いルージュの引かれた唇は、とても未成年の女子大生には見えないほど艶やかだ。

(スタイルに至っては、沙苗さんよりも優れている)

薫より僅かに高い170センチ弱の肢体がすらりと路面に立ち、開きつばなしになっていたロードスターのドアが閉じられる。

小柄な体躯に豊熟した女体を隠している沙苗とは対象的に、菜央美の身体は目のやりに場に困るほど刺激的だ。レースシャツにスプリングジャケットと、これといって変哲のないトップだが、母親に勝るとも劣らない巨乳が大きく開いた前襟から魅惑のデコルテを作りあげている。

鋭く括れた蜂腰から媚臀へと柔らかな稜線が流れ、スリットスカートから伸びる美脚は同程度の視軸に在る薫よりも長い。シルクベージュのパンティストッキングが悩ましい光沢を放ち、チャコールブラックのパンプスがきめ細やかな脚肌を際立たせる。(モデルのアルバイトをしているって言うのも、納得できる……:んだけれど)

実際、半端な女優やアイドル程度では及びも付かないほど、その容姿は端麗だ。菜央美の掲載されたファッション誌を見せてもらったが、クールな雰囲気纏ったその

タイトル

姿は、少し前までは女子高生だったとは思えないほど知的でセクシーなものだった。

デジタル処理された誌面を介しても強烈な魅力を発している女性なのだ。当然、こうして直に菜央美の全身を目にすれば、その美貌は一段と濃密なものとなる。

「あぁっ、やっぱ薫君って可愛いっ」

家柄もよろしく名門で知られる私大に通う、才色兼備の美しきセレブリティー――。

そんな誰もが抱くであろう印象は、黄色く変質した嬌声によって瓦解する。

「ちよ、待っ――うわっ」

彫像の如く硬質だった貌が、一瞬にしてふにやりと蕩ける。破顔に連動して菜央美が大きく腕を広げ、飛び付くようにして薫に抱きついた。

(菜央美さん、外見と性格のギャップが激しすぎるよ)

ただ、其処に在るだけなら綺麗すぎて近寄りがたい女子大生なのだが、実際の菜央美は極めて朗らかでアクティブな性格をしている。その上、知的な容貌からは想像が付かない大の可愛いモノ好きであり、琴線に触れるものに対しては目の色を変える。モデルのバイトをしているのも、可愛い女の子と沢山会えるためらしい。

「もうっ、どうして男なのにこんな髪がサラサラで肌も綺麗なの。あぁ、反則よ」

抱きつくだけでは飽き足らず、菜央美は薫の頭部を抱え込むと豊かな双丘へと細腕

に見合わぬ力で引き寄せる。シャツを透かしたブラと乳房の感触が頬に伝うが、生憎とそんな僥倖を楽しむ余裕が薫には無い。

(昨晚初めて対面したばかりなのに、ここまで好かれるなんて)

沙苗を通じて薫は久瀬家の面々に紹介されたわけだが、菜央美は一目見るなり薫を愛玩した。自己紹介する前に生年月日を聞き出し、靴のサイズに至るまで根掘り葉掘り問い尋ねてくる女子大生には周章困惑したものだ。

(そりゃ僕だって、好意を持たれて悪い気はしないけれど)

人から嫌われるより、人に好かれた方が良いのは明白だ。薫も男なので年上の、それも美しい女子大生から好かれるなら、男子高校生として鼻が高い。

ただ、初対面から二十四時間も経っておらず、距離感すら有耶無耶な状態で一方的に好意を抱かれると、嬉しさよりも戸惑いが勝ってしまう。

美女の胸に搔き抱かれた感触や、香水混じりの艶やかな匂いに感溺するより、焦燥感と混乱が先んじる。だからといって、がむしゃらに振り解きたいほど嫌では無く、突き飛ばしたいほど苦しいわけではない。

率直に抵抗の意を示せず、薫は助けを求めて沙苗に手を伸ばした。

「菜央美ちゃん、ダメよ。こんな狭い道であんなスピードを出して運転しちゃ」

タイトル

声に出せぬ嘆願が果たして通じたのか、幼げな熟女が女子大生の娘を窘める。ただし、期待に反して沙苗の介入は悩ましい苦境を打開するものとはかけ離れていた。

「だってさあ、ママ。朝から薫君に会えるとは思わなかったもん」

「安全運転はしなくちゃダメ。この車を買ってあげる時、約束したでしょう？」

沙苗の声は迫力の欠片も無く、叱責とはかけ離れた柔らかな注意だったが、それも母親としての威厳は内包されていたらしい。菜央美は言い訳一つすることなく「はい」と素直に応じると、己の欲望にもブレーキをかけたのか薫を搔き抱いていた手をすりと解く。女体の柔らかな感触が頬から薄れ、乳房から滲んでいた淡い熱が急速に身体から抜け落ちていく。

(やっと開放された……ちよっと、惜しいけれど)

菜央美との距離に反比例し、困惑と焦燥は薄れていく。その一方、極上の美女が残した温もりと魅惑の匂いは、牡の本能を執拗に擦った。

「怒られちゃった。薫君が可愛すぎるのも困りものだよね」

悪びれた様子が無く、菜央美は「あはは」と朗らかに笑う。おまけに、まるで原因はお前にあると言わんばかりに、それでいて悪意が微塵も介在しない責任転嫁をするのだから、薫としては「はあ」と返すしかなかった。

(好意で言ってくれているんだろうけれど、あんまり嬉しくはないんだよね)

菜央美の礼賛に近い褒め言葉に、薫は乾いた笑顔で応じる。

薫は美少年だ。他人からはひっきりなしにそう評されるし、鏡と対峙すれば確かに自分でも整った顔立ちをしているなと思う。

しかし、その容姿は菜央美が可愛いと連呼することからも明白なように、悉く女性よりなものだ。さらりとした髪質のショートカットや長い睫のせいで小さい頃から女子に間違えられ、声質もメゾ・ソプラノなので合唱すると一際目立ってしまう。

(辛うじて、身長だけはそこそこ伸びてくれたんだけど、結局体付きだけはあんまり変わらなかったし)

少しでも男らしい体躯になろうと、中学生の頃は水泳部に所属して全身運動に努めたものだが、体質的に筋肉が付きにくいのか目に見える変化は殆ど見られなかった。

皮下脂肪だけは確実に減ったのだが、これは最早置換に近い。トレーニングというよりダイエットにしかならなかった。

(父さんと母さんには感謝しているんだけど)

繊麗な容姿に健康な身体で生を受けたのだから、両親にケチを付けるはずもない。受難といえ、高校生になっても時折性別を確認されることくらいだ。

タイトル

ただ、どうせ男に生まれたのだから、せめて「可愛い」ではなく「格好良い」と一度は言われて見たかったというのが、偽りの無い本音でもある。

「頬もふわふわで、お餅みたいにつるつるしてる。薫君、肌もすごい綺麗だよねえ。同級生の女の子にも言われるでしょ？」

「ええ、まあ……はあ……」

そんな青少年の心境を知るよしもない女子大生は、遠慮の欠片も無く薫の頬を撫で回す。正直言えば直ちに止めて欲しいのだが、あまりにも熱心に愛撫してくるので無下に手を払うわけにもいかない。

「菜央美ちゃん、アルバイトの時間は大丈夫？ 今日移動の時間があるから、いつもより早く事務所に行くんじゃないかなかったの」

「うわっと、そうだった。もう、せっかく薫君を可愛がれるチャンスだったのに」

本当に失念していたのだろう。菜央美はハッと目を瞬かせると、忌々しいとばかりに柳眉をねじ曲げた。未練がましげに紅唇を噛み締める女子大生だったが、美貌の持ち主なだけにそんな仕草一つとっても魅力溢れる画になる。

「ま、しょうがないか。薫君とイチヤイチヤするのは帰ってからの楽しみ、ね」

薫の頬肉を弄くついていた繊指がつうとなめらかに滑り伝う。ネイルケアされ光沢感

に溢れた指先が、ふにゆりと唇に沈んだ。

菜央美の長い睫がふるりと揺れ、小さなウインクが投げかけられる。麗しい女子大生には似合わない、何処か子供っぽく茶目つ気に満ちた誘惑。そんな無垢な少女を想起させるアンバランスな可愛らしさが、薫の胸中を俄に疼かせた。

「薫君、昨日も言ったけれど、一人暮らしに慣れるまでは我が家で晩御飯を食べていてね。あ、今日の夕飯は大体七時だから忘れないで」

一足先に車へ乗り込んだ沙苗が、助手席から小さく手を振ってくる。僅かに遅れて菜央美が運転席に滑り込み、慣れた手つきでミディアムロングの髪を束ね、キャスケット帽へと押しこめた。

「それじゃあねえ、薫君」

イグニッションキーが回され、ロードスターが機械仕掛けの咆哮をあげる。スポーツカーらしい小気味良いエンジン音が大気を震わせ、閑静な住宅街を駆け抜けていく。

二人の美女達が瞬く間に視界から消え去り、やがて微かな排煙と残響が途切れた。

騒がしい菜央美がいなくなった反動からか、住宅街からは物音が一扫されてしまう。桜の舞う音さえ聞こえてきそうな静寂の中、数寄屋門の奥から乾いた物音が響いた。

「おはよう、如月君」

タイトル

その音に導かれ振り返る最中、鈴音の如き美声が薫の名を呼んだ。

「久瀬——先輩」

千本格子を透かした先で、薫の待ち人にして久瀬家の次女——久瀬結花^{ゆづか}が、玄関前に立って優雅な微笑みを浮かべた。

（沙苗さんも菜央美さんも美人だ……でも——）

久瀬結花は——薫が密かな恋心を抱いている上級生は、あの二人とは一線を画している。三十路ながらあどけなさを残した沙苗とも、十九歳とは思えない艶やかな魅惑を漂わせた菜央美とも異なる、清廉な美しさ。

（それでも、先輩はあの二人と家族なんだなって感じられる）

生来の麗しさに加え、家柄の良さを感じさせる気品に溢れた顔立ち。血の繋がりを裏付けるように、切れ長の双眸は菜央美に酷似しているが、目元の柔らかさは沙苗の温和さを受け継いでいる。

（先輩なら、何気なく歩いているだけでも絵になってしまふ）

春の陽光を浴び、腰まで届く長い黒髪がふわりと柔らかに風を孕んだ。

菜央美の妹だけあって結花も背丈が高く、薫と殆ど変わらない。ただし、菜央美が女の魅力を溢れかえらせた体付きをしているのに対し、結花は随分とスレンダーなス

タイトルだ。勿論、バストもヒップも人並み以上にはあるが、沙苗や菜央美と比較すると慎ましやかなサイズであるのは否めない。

(けど、それが逆に魅力を増させている気もする)

結花の背筋は凜々しく伸びており、歩行にすら芯の通った美しさが表れている。体幹に追従した四肢はたおやかであり、剛と柔が軽妙に組み合わさった様はまるで映画のワンシーンのように華やかだ。

ブレザーの袖口から伸びた繊維指は淡雪の如く白く、透明感に溢れた爪は健やかな艶を帯びている。赤と深緑のプリーツスカートからは黒ストッキングに彩られた美脚が伸び、歩を進めるごとに陽光がナイロンを目映く散らした。

(お嬢様然とした綺麗さに見劣りしないのが、先輩の凄いところだ)

薫と結花の通う斎美市立高校は、県内でも有数の進学校だ。当然、生徒の学力は高く、その優れた進学実績から在校生であることにプライドを持つ者も多い。

そんな中、結花は常に上位五指を前後する成績をキープしており、生徒会の会長職も務めているため人望も厚い。調整役に優れており、血の気の多い体育会系の運動部員達も、結花を前にするとたちまち毒気を抜かれて従順になるともっぱらの噂だ。

(女生徒の中でも一番人気があるって噂されるのも納得するよ)

タイトル

美しく、気品があり、理知に富み、人当たりも良い——これだけの好条件を備えているだけあって、結花の人望は絶大だ。色に飢えた男子生徒は言うまでも無く、一部の女生徒からも熱烈な支持を受けており、毎年同性から大量のバレンタインチョコを獲得している。

(そんな先輩と、父さんの転勤が切っ掛けでこんな近くで住める事になるなんて)

それも、単なるご近所さんではない。沙苗の厚意もあって、しばらくは何度も晩御飯を同じテーブルで囲む日々が訪れるだろう。こんな恵まれた環境に在ると同級生に知られたら、男女問わずに嫉妬の炎で焼き焦がされかねない。

何の因果か久瀬家と関わり合いになる一連の流れに、薫は縁なるものの力を感じずにはいられなかった。

「お、おはようございます。久瀬先輩」

女子高生のローファーが玉砂利をさくりと踏んだ。数寄屋門を隔ててほんの数メートル先で、薫は高嶺の花に正対する。互いの顔が明瞭に見えるようになってから改めて姿勢を正すと、結花は淑やかな微笑みを零した。

「ごめんなさい。わざわざ家まで来て貰ったのに待たせちゃって」

上級生の生徒会長が門を潜り、混じりけのない風采の全貌が露わになる。結花が頭

を下げようとしたので薫は「とんでもない」と、大慌てで遮る。

元より、指定の時間より早く来てしまったのだから、多少の待ち時間など誤差の範囲だ。約束の時間通りに来た例しがない男友達を引き合いに出すならば、こんなものは待ったうちにも入らない。

「今さっきまで、沙苗さんや菜央美さんが居たので色々話しも……でき……」

時間潰しも出来ていた旨を伝えようとしたところ、結花の柳眉が僅かに痙攣する。

穏やかな貌がみるみる曇るにつれて、薫の言葉も尻窄みとなった。

「如月君。姉さんに、何かされなかった？」

「い、いえ、大丈夫です。特に何も」

どうやら、結花の懸念は姉の素行にあるらしい。何か言われた——ではなく、何かされなかったかと尋ねてくるあたりが、菜央美の行動を熟知しているのが窺える。

(どうもお姉さんの前だと、調子が狂うみたいだ)

引越しの挨拶で薫を気に入り、熱烈なスキンシップをはかろうとする菜央美を、結花が幾度となく引き剥がしてくれた昨夜の記憶が蘇る。日頃は平静以外の表情を見せたことのない生徒会長が、周章に慌てふためく様は薫を一驚させたものだ。

「そう……それなら、良いのだけれど」

タイトル

聡明な結花のことだ。薫がある程度の嘘を吐いてはいるものの、無理に追求して白状させるほどではないと見切ったのだろう。真っ直ぐに薫を見つめた後「ふう」と、桜唇から短い溜息を漏らした。

「姉さんの名譽の為に言っておくと、本人に悪気はまったくくないの。ただ、夢中になると周りが見えなくなつて……」

「ええ、それは昨日今日で、何となく察しました」

酒宴の只中にある者が周囲の迷惑を顧みることが無くなるのと、基本的には同じなのだろう。違いがあるとすれば、前者は酒を呷らなくてはならないが、菜央美は一滴のアルコールも必要としない点だ。見方を変えれば、これは一種の才能だろう。

「いい、如月君。相手が大家の娘だからって、我慢はしちやダメよ。何かあったら、すぐに私に相談してね。きつと力になつてあげるから」

美少女のほっそりとした繊手が、胸の膨らみに載せられた。本人としては頼りがいのある上級生を演じたつもりなのだろう。実際、揺るぎのない自信と張りに満ちた美声は、生徒会長にふさわしいカリスマを帯びている。

(うわ……先輩の胸が、手に押されて)

しかしながら、結花に憧れている薫にとつて、その光景は目の毒でしかない。緩や

かであるとはいえ、ブレザーを湾曲させた膨らみが女子高生の掌が載せられたことで、よりカップサイズを強調させているのだ。

胸に視線が行かないよう、薰は必要以上に結花の双眸をしつかりと見据える。そのごまかしが真摯な態度として捉えられたらしく、美少女は安堵の微笑みを浮かべる。

「さて、と。せっかく遅刻がないんですもの。学校までの新しい道のり、ゆっくり覚えていきましよう」

学生鞆すら手に持つこと無く、結花がゆっくりと歩き出す。春の微風がブリーツスカートを揺らし、一七歳のすらりとしたふとももを露わにした。

「はい、先輩。よろしくお願いします」

一瞬、青少年を悩ます光景に視線が奪われるが、即座に理性が頭を振らせて欲望を散らす。

新学期はまだ始まらず、未だ正門の閉ざされた学校に赴くため、制服に身を包んだ結花と薰は登校の予習を始めた。

タイトル

「ここの公園を縦断していくと、学校までの道のりをショートカットできるの。緑も

多いから、気分がリフレッシュされるのも魅力ね」

滑り台やシーソーといった定番の遊具は無く、手入れをされた林といった風情の自然公園を、結花が先導して歩を進めていく。小綺麗なローファーが軽やかに地を踏むごとに、乾燥した腐葉土がサクサクと耳に心地よい音を立てる。

「ただ、雨の日や初夏になったら、どれだけ遅刻しそうでもここを通るのは止めちゃうの。さて、それは何故でしょう？」

突然振られたクイズに当惑するものの、微かな含み笑いを湛えた結花に促され薰は答えを求めて四方を見渡す。

「ええと、雨がダメなのは靴が汚れるからだと思いますが……」

補正されたアスファルトではなく、剥き出しの地面を歩けば当然靴は見るも無惨な姿を晒すはめになるだろう。これは簡単だが、初夏になると駄目になる理由が判然としない。虫にでも刺されるのだろうかと思っただが、それなら真夏の方が適切だろう。

「それじゃヒントをあげる。頭の上には、脇から伸びた枝がいつばい茂っているでしょう。其処に若葉が茂るとどうなると思う？」

「……ああ、そうか。わかりました」

初夏になり若葉が茂り始めれば、それを餌とする毛虫が殺到する。その内の何割か

が、足——はないが、滑って落下してくるのだろう。

ヒントを元に所見を述べると「正解」と結花が頬を綻ばせた。

「昔、それを知らなくて肩にこんな大きな毛虫が落ちてきたの。私、こう、ウネウネつてした虫が苦手だから、思わず悲鳴をあげちゃった」

「あはは、僕だったら絶叫するだけじゃなくて寿命が縮んでいますよ」

結花の細指が示した幅は大体5センチ程のものだ。毒が有る無し以前の問題として、昆虫学者か毛虫愛好家でもない限りパニックを起こすだろう。

ややオーバーな表現を交えて同意すると「やっぱりビックリするよね」と結花は知己を得たとばかりに喜んだ。

（最初は断ろうとしたけれど、先輩に道案内して貰ってよかった）

引越し先の地理に疎いため、始業式が開かれる前に通学路を開拓しようとしていたところ、ナビゲーターを買って出てくれたのが結花だった。

タイトル

道探しはスマートフォン地図アプリを参照すればいいこと。何より、学校生活はまだ始まってはいないものの、高校三年生の貴重な時間をこんな些事に使わせてしまふのが恐れ多く、当初は丁重に固辞する。そんな返答に対し「生徒会長の命令です」と、結花は淑やかながらも有無を言わせぬ口調で薫の異論を封殺した。

同じ生徒会で会計に就いている薫だけに、結花の命令には抗えない。

（先輩のナビゲーションは、地図アプリなんかじゃ絶対に代用がきかない）

単に、学校までの道のりを開拓するなら、スマートフォン片手に道路を進んでいけば事足りる。最短ルートが素早くわかるので面白みはないが、過不足はない。

一方、結花の道案内は其処此処で注釈が入る。毛虫の一件からしてわかるように、利用者にしか見えない経験をその都度教えてくれるため、少し歩を進めるごとに目新しい発見がもたらされていた。

チェーン店と異なり、看板だけでは何を取り扱っているのか不明瞭な個人商店の詳細。拡大図を睨んでいるだけではわからない坂道の迂回路。更には玄関先を横切るだけで吠えてくる猛犬の住処まで、実に仔細な情報を提供してくる。

おまけにその一つ一つを妙味溢れる語り口で行ってくれるので、ゆっくりとした足取りなのに驚くほど時間の経過が早く感じられた。

（先輩と一対一で話す機会なんて殆ど得られなかったけれど、こんな茶目っ気のある人だなんて知らなかった）

生徒会では一応要職に就いている薫だが、会計役なるものは対外的には地味な存在だ。対して、結花は全校の代表でもある生徒会の貌であり、必然と多数の相手から話

を聞かなくてはならない。業務ですら一対一で話す機会は希であり、ましてクラスメイトでもない上級生と私事を話し合う機会など皆無に等しかった。

それだけに、結花と並んで歩く情景が夢物語に感じてしまう。

(こうして一緒に歩いているだけでも、幸福感が満ちあふれてくる。こんなこと、今までデートした時だって一度も感じたことがなかった)

凜々しくもたおやかな後ろ姿を見ながら、薫はぼんやりと過去を思い出す。

入学してからこの一年、ずっと結花への思いを秘め独り身を貫いている薫だが、中学時代に男女の交際は経験している。二人の女子と付き合い両者の処女を散らしているのも、童貞もとっくに卒業していた。

(キスもセックスもしたけれど、恋焦がれてしまったのは先輩が初めてだ)

あの当時は、恋愛というものがわかっていなかったのだ。付き合い合った女子は、どちらも彼女からの告白を契機に付き合い始める。ただし、薫自身は彼女達に特別な感情を抱いていたわけではなく、好きになってくれたのだから付き合い合ってみよう——という、消極的な動機しか持ち合わせていなかった。

結果、感情のすれ違いと齟齬が積もり、どちらも半年を経たず関係は破局となる。相手に異性として好意を抱かなくては彼氏彼女の繋がりには保てない——そう覚った

タイトル

薫は、以後女子から告白されても断るようになる。

高校に進学してもそのスタンスは変わっていない。女性的とはいえず、容姿端麗も手伝って告白は何度かされているが、結花に惚れ込んだこともあり、きつちりと断りを入れるようになっていた。

「これで公園はお終い。ここから学校まで、十分もかからないわ」

腐葉土が砂利に変わり、林が占めていた視界が一気に開ける。アスファルトに補整された四車線の道路が眼前を横たわり、木々の静寂は一転して街の喧騒へ移り変わる。ただ一人、結花だけは変わらない。閑静な住宅街に在ろうと、木漏れ日に降り注ぐ林道であろうと、人々が往来する街中であろうと、凜とした美しさは揺らがらない。

黒い絹糸を彷彿とさせるロングヘアが春風に弄ばれ、ふわりと宙を泳ぐ。優しい香りが微風に溶け、薫の鼻梁を柔らかに擦った。

(もう、あと一年僕が早く生まれていたら——)

接点の希薄な上級生と下級生ではなく、同級生として肩を並べられたのなら、結花への思いを胸に秘め続けることはなかったのではないか。

振られるのを覚悟で、胸を焦がしている想いを伝えられたのではないか。

そんな無理を前提とした願望が、結花の後ろ姿を捉えるうちに腹の底から沸き上が

つてくる。

「おう、結じゃないか」

交差点の赤信号で歩みを止めた直後、薫の馬鹿げた妄想は側面から呼びかけられた男の声により霧散する。

「東堂先輩——」

身体を半身にずらすと、視界の先に雄々しく立つ青年が映った。

「おっと、如月も一緒か。おはよう」

薫の先輩にあたり、生徒会では副会長を務め——そして、久瀬結花の彼氏でもある東堂龍成が、剛毅でありながらも爽やかに挨拶をする。

（僕が一年早く生まれたところで、東堂先輩には絶対に敵わない）

結花と対を成しように男子生徒の中で筆頭名が知られているのが、この龍成だ。

身長一八〇センチに迫る長身に彫りの深い精悍な顔付き。生徒会という文系色の濃い集団にありながらプライベートで武道を嗜んでおり、発達した筋骨が服の上からでも容易に窺える。

雄らしい屈強な体躯を備えながらも学業にも秀でており、結花とは凶らずも毎回成績順位を拮抗させる頭脳の持ち主でもある。

タイトル

女生徒から浮ついた嬌声すらも忘れさせる、文武両道を絵に描いたような男子高校生は、その誠実な人柄もあって同性からのやかみも驚くほど少ないと聞く。

（身分って言い方は時代錯誤だろうけれど、家柄だって頭一つ抜けている）

結花の実家たる久瀬家が大地主の家系であるように、龍成はこの地域では最も有名であろう建設会社「東堂建設」の跡取り息子だ。下請けを含めれば斎美市の建築物の半分程度には東堂建設が絡んでいると言われており、業種が業種だけに久瀬家との繋がりも古く深い。一族の生業が関与していた経緯もあって親同士が懇意にしており、しかも結花と龍成は小学生からの幼なじみと来ている。

そんな男が結花の彼氏なのだ。薫が一年早く生まれたところで、スタート地点からしてかけ離されているため何の意味もなさない。

むしろ、余計に手が届かない存在となって、心をじくじくと膿ませるのが関の山だ。「二人して何処に行くんだ？ 春休みだってまだ明けてないのに制服なんかに着て」訝しむ——というには大袈裟だが、始業式すら始まってないのに、制服姿でいる二人に違和感を覚えたのだろう。龍成は片眉を跳ねあげて、結花と薫を交互に見比べる。（不要な誤解をされたら大変だ）

彼女である結花が、龍成以外の男と二人きりになっているのだ。しかも、その旨を

当の本人が知らないとあれば、龍成が芳しくない想像を働かせるのは避けなくてはならない。

「あら、龍君。昨日『如月君が家の近くに引越してきたから、通学路を教える』ってメッセージ入れたじゃない。もう、見て無いのね」

当惑を抑えつつ状況説明をしようとする薫に先んじて、結花が逆に龍成へ問う。

「ああ、昨晩はスマホのバッテリーが切れたから、まだ今日は起きてからまともに見て無かったんだ……つと、これか。すまん、見落としていた」

質問が追求となって投げ返されてきたからだろう。ポケットから取り出したスマートフォンを弄りながら、剛毅な龍成にしては珍しく言い訳染みた口調で弁解する。

「転居届の提出も合わせてしてくるから、校内にも入らなくちゃいけないの。斎美市高校校則第四条の二項、覚えている？」

「在校生は当校敷地内において規定服の着用を義務づける——だったか。なるほど」

大多数の生徒がまとも覚えていないであろう校則を引き合いに出す結花だったが、さすが生徒会副会長なだけあって龍成も即座に概要を諳んじる。恥ずかしながら、会

計職に在りながら、そんな校則があると結花が指摘するまで薫は知りもしなかった。「守ってる奴どころかそんな校則があることすら知らない奴が多いだろうが、生徒会

タイトル

長としては範を示さなくちゃならない——というわけか。面倒だな」

「それは男の人の見方ね。女の子側からしてみれば、私服選びに長考しなくていいしコーディネートの失敗も無くなるから、中々理にかなった校則だと思うわ」

歩行者信号が青に変わった。待ちわびていたように、結花と薫を残して歩行者達が横断歩道を渡っていく。

「それじゃまたね。さあ、行きましょう、如月君」

「あ——は、はい。東堂先輩、失礼します」

一度も二人の会話に口を挟めぬまま、薫は歩を進めた結花に付き従う。互いを愛称で呼び合っている情景を目にすれば、先輩後輩の間柄でしかない自分が如何に結花から遠い存在であるかを思い知らされる。

(けれど、僕は——)

ちようど中央分離帯のある、道路に作られた砂州のような場所に至ると「如月ッ」と背後から龍成が声を張りあげた。

「一人暮らしの準備、大変だろうがしっかりやれよ。もし力仕事が必要になったら遠慮無く俺を呼べ」

行き交う車の滑走音に負けないエールが、快活な笑顔を見せた青年から送られる。

(僕は——この二人を応援していきたい)

薫は結花に熱烈な恋をしている。同時に、この逞しい青年には、同性としてこの上ない憧れを抱いている。もし、結花が別の男と付き合っていたら、玉砕覚悟で告白し、振られてもめげずに求愛をしただろう。

(相手が東堂先輩なら、久瀬先輩にふさわしい)

自分が尊敬する男だからこそ、自分が惚れた女の恋仲を邪魔する気にはなれない。それ故に、薫は結花への想いを打ち明けない。

甘くほろ苦い好意を抱いたまま、片思いを続けるだけで満足だった。

(久瀬先輩が卒業するまで……この一年だけ、久瀬先輩を好きでいさせてください)

龍成ほどの声量がない薫は、言葉を返す代わりに背筋を正して頭を垂れる。高校三年生には見えない好青年は軽く片手を上げ、広い背中を見せて立ち去って行った。

青信号が点滅を繰り返す。結花が小さな悲鳴をあげて小走りになる。

黒く輝く黒髪が躍る様を目に焼き付けながら、薫も結花の後を追って駆け出した。

一章【新しい経験】 可愛い母の誘い

満開だった桜花もとうに舞い終わり、薄紅一色だった梢からは瑞々しい若葉が伸びている。春の陽気は日に日に暖かさを深め、まだ夏はおろか梅雨も先のはずなのに、時折ざらりと目映い日光を大地に浴びせていた。

「はい、薫君。どうぞ召し上がれ」

初夏の不安定な日差しが西に傾き、そろそろ夕暮れに備えて色を変えようかという時刻。夕食にはまだ随分と早い時間であるにもかかわらず、如月家のキッチンではガスコンロにかけられた手鍋から、牛肉の時雨煮が甘辛い匂いを沸き立たせている。

鍋蓋がカタカタと静かに鳴り響くダイニングにて、竹楊枝で押し切られた葛餅を掲げた沙苗がにこりと微笑んだ。

「えっと……それじゃ、頂きます」

舌を伸ばせば舐められるまで近づけられた葛餅に一度視線を落とし、幾分の躊躇の末に薫はおずおずと口を開く。宙を滑るように葛餅が唇に触れ、僅かに零れた黄粉と共に舌へと載せられる。

「お店のものとは比べられないでしょうけれど、お味の方は如何かしら」

「あ、その……美味しいです。とつても」

舌の上で蕩けていく葛餅はお世辞を抜きにしても美味と評されるに値する。沙苗の言う通り、名店の職人によって洗練された味には遠く及ばないだろうが、手作りにはいしつか出せない素朴な味わいがある。

滑らかな葛の舌触りもさることながら、甘さを抑えられた黄粉がふんだんに使われているのが、薫としてはとてもポイントが高い。

「良かったあ。いっぱい作ってきたから、沢山食べてね。はい」

充分に口内で賞翫された葛餅が嚥下されるよりも早く、第二陣が竹楊枝によってずいと差し出される。薫が口にくれたのがよほど嬉しかったのか、沙苗は三十八歳にしてはあまりにも幼く、それでいて魅力に溢れた笑みを満面に咲かせた。

その片手に載せられた中皿には、手付かずの葛餅が1ダース近く並べられている。

タイトル

（美味しいことは美味しいんだけど……どうして、料理を覚えてもらうだけだったのに、こんなことになっているんだろう）

二口目の葛餅を舌の上で転がしながら、湯気を立たせて無関係を決め込んでいる手鍋へと薫は横目を走らせる。

そもそのものきっかけは、久瀬家の献立を教えて欲しいと沙苗に頼み込んだことに起因する。母の炊事を手伝う過程で人並みの調理技術を身につけていった薫だが、献立そのものを組み立てた経験は皆無だ。おかずを一品作るのには難しくないのだが、食卓に出す料理の全体像が上手く描き出せない。一人暮らしの食生活は物足りないものになり、自炊は何処かちぐはぐなものになっていく。

そうした経験不足を補うため、母として久瀬家のキッチンを切り盛りしてきた沙苗に薫は教えを請うた。

（勿論、僕にできる範囲でお礼をするつもりだったんだけど……）

薫の願いを快諾してくれた沙苗だが、はっきりいってこれは彼女にとってなんのメリットも無い。娘なら花嫁修業の一環になるかもしれないが、薫は男でしかも友人の息子でしかない。

ついでに言うなら「慣れている場所でやりましょう」と、わざわざ薫の家に来まで通

ってくれるというおまけ付きだ。礼を尽くさなくては仁義に背く。

(こんな形のお礼を望まれるなんて、思ってもみなかった)

礼を申し出た薫に提示されたものは、沙苗の作ったおやつを食べて貰うという、何とも不可解なものだった。

意外な返礼を要求されたが、無理難題というわけでもない。試食役を務められるほど食通である自信は無かったが、沙苗の恩に報いられるならばと、薫は即座に快諾した。

「はい、薫君。もつともつと食べてね。はい、あーん」

莞爾と――それこそ、楽しくて仕方が無いとばかりに、葛餅が口元へと掲げられる。どうやら沙苗は薫に試食をしてもらうのではなく、何かを食べている情景が見たかったらしい。それも、ただ単に食べるだけではなく、沙苗自身の手によって食べさせるのがポイントらしく、薫が一人で食べようとしたところ断固として拒否された。

(こういう所は、確実に菜央美さんへ遺伝していると思う)

背丈も顔立ちも類似点が希薄だが、この種の執着は瓜二つだ。まるで池の鯉になつたみたいだと思う薫だったが、この感想はあながち間違いでもないらしい。

タイトル

現に、結花の話によると、昔は自然公園に集まる鳥たちのために、パンを一斤持つ

て餌やりをしていたらしい。公園管理者に餌やりを注意されてからは自重しているようだが、動物園やら水族館に行くとき娘をほったらかしにして餌やりコーナーから離れなくなるとのことだ。

我が子においても愛情の発露として同じことを行いたがるらしいが、菜央美も結花も良い年齢なのできっぱり断っている。そんな沙苗のもとにやってきた薫は、表現は悪いが鴨が葱を背負ってきているように見えたのだろう。

(先輩には、無理に付き合う必要は無いつて言われたけれど)

高校二年生にもなって乳児のように物を食べさせられるのは気恥ずかしいが、実害はないので断るのも難しい。他人には決して見せられない光景だが、お菓子はお世辞抜きに美味しいし、何より沙苗がとても幸せそうなので無下にできない。

(恥ずかしさとかよりもこっちの方が問題なんだよね)

竹楊枝に突き刺された葛餅からほんの僅かに焦点をずらせば、女体の背丈に対してアンバランスな巨乳が、白いワンピースに包まれふると揺れている。

本人はまるで自覚がないようだが、この豊熟した乳肉は思春期真っ盛りの薫には目の毒以外のなものでもない。なまじ気温が暖かくなり、それに伴って沙苗の衣服も薄手となっているため、乳房の輪郭がより明確になっている。

(みんな誤解しがちだけれど、僕だってちゃんと性欲はあるから……凄く辛い)
 少女と見間違われる顔立ちで体軀も中性的な印象が拭えない薫だが、性別そのものは紛れもなく男だ。年頃の男子らしく、性欲もしつかり備わっている。
 そんな青少年の眼前に可愛らしくも魅惑の肢体を持つ未亡人が座っており、あまつさえ無防備に乳房を揺らしていた。

(ある程度女の子に慣れているけれど、沙苗さん相手じゃまったく意味が無いよ)
 中学生の際に童貞を卒業したこともあり、薫は多少は女子に対する免疫を獲得している。少年誌を飾るグラビア程度では興奮しなくなってしまうたし、女子に顔を近づけられても相手が結花でも無い限り心臓が早鐘を打つことはない。

しかし、それらの免疫はあくまで女子に対してであり、成熟した女性には何の効果も無かったと思いが知らされる。中学生の元彼女達は背丈こそ沙苗と大差無かったものの、女の艶美な四肢とはかけ離れていた。肉付きや腰付きは言うまでもないとして、バストに至っては乳房と表現するのが心苦しくなるほどの平坦さだった。

(こんな大きなおっぱいなんだから、きつと凄く柔らかいんだろうな)
 ほんの僅かに身体が動くだけで、乳房の輪郭がワンピースに官能の漣を立てる。
 デコルテから覗く深い谷間が、美麗な乳肉をこの上なく強調させていた。特大のマ

シユマロを彷彿とさせる雪肌は、指を乗せたら際限なく沈み込みそうだ。

(沙苗さんは先輩のお母さんだ。こんな妄想をしちゃいけない)

結花に彼氏がいるとはいえ、片思いをしている上級生の母親に欲情するなど、男として見境がなさすぎる。沙苗が幾ら愛らしく、魅惑を宿した体付きをしているとはいえ、性欲の対象として見てはならない。

そんなことは、薫とて重々承知している。しかし、瞳孔に流れ込んでくる艶やかな画の数々は、男子高校生の股間を卑熱に疼かせた。

(目を逸らしても、沙苗さんの良い匂いが染みこんでくる)

理性に活を入れ女体から焦点を外しても、美熟女が纏った甘い匂いからは逃れられない。薫に料理を教えるために来ているので香水の類いは付けていないようだが、それでも成熟した女が醸し出す甘いフェロモンは隠しようが無い。

柔らかなコンディショナーの香りと混ざり合った匂いが、薫のペニスに熱い欲情を惹き起させる。大量の血流が肉茎へと注がれ、膨れあがった怒張によってズボンがもっともりと張り詰めた。勃起を抑えこもうとするが、性欲旺盛な青少年の身体は本能の赴くままに獣根を昂ぶらせていく。

(このまま、沙苗さんが気付かずにくれるのを願うしかない)

下手に沙苗を拒絶できる身分でもないのです、ここは忍の一字だった。幸い、沙苗はお菓子を食べさせるのに夢中になっているため、薫の下半身に牡の情欲が渦巻いていると気付いていない。

「あ——」

本能から無尽蔵に噴き出してくる欲求を理性が抑圧し続ける。その精神の拮抗に集中力を割かれ、うっかり口を開くタイミングを見誤った。

早く閉じすぎた唇が竹楊枝から葛餅を搦り上げた。シャツの前立てに沿って黄粉の塊が転がり落ちていく。落ちる物を拾おうとするのは、日常生活の中で刷り込まれた習性なのだろう。考えるより早く、転がる葛餅へと手が伸ばされる。

「あらあら、大変」

そうした咄嗟の反応は沙苗にも備わっていたらしい。一際大きく黄粉を撒き散らした直後、シャツの段差から跳ねた葛餅がズボンのジッパーに着地し、そこに沙苗の纖手が伸びてゆく。

(まずい。見られるだけでもばれかねないのに、触られたりしたら)

股間の膨らみは見間違いと取られることはあるかもしれないが、握られでもしたらいかなる言い訳も不可能だ。沙苗の手を払い除けるのが最も確実に危機を乗り切る方

タイトル

法であったが、年上であり結花の母でもある女性にそんな無礼を働けるはずも無い。

結局、沙苗より早く自分の掌で股間を覆い隠すしかないと思いに至る。

「えっ——薫、君」

一瞬の逡巡が、致命的なミスを犯した。僅かに反応が遅れた薫の掌が、沙苗の掌へ被せる形で股間に押しつけてしまう。軽く触れられる程度ではない。まるで、薫自身が男性器を握らせるように、沙苗の掌がしっかりと股座に押しつけられた。

幸福に満ちていた沙苗の顔が、一瞬にして驚愕へとすり替わる。ズボン越しに、柔らかな女の繊指に緊張が走る。

「ご——ごめんなさいっ。沙苗さんっ」

己の犯した大失態に目眩を覚えながら、薫は沙苗の掌を股間から引き剥がす。

(沙苗さんに嫌われる……ああ、なんてバカな真似を……)

股間に手を押しつけてしまったのは不慮の事故として片付けられるかもしれないが、ズボンの下で勃起していた逸物にはどんな釈明をしても正当性を持ち得ない。

こんな謝罪をしたところで無意味なのはわかっているが、それでも薫は深々と頭を下げずにはいられない。結花に悪事が伝わる恐れもさることながら、優しく愛らしい熟女から嫌われるのが怖かった。

「大丈夫よ。今のはちよっとしたアクシデントだってわかってるわ。ほら、薫君。もう、顔を上げて」

膝頭に乗せていた両手に、沙苗の掌がそつと置かれる。慈愛を感じさせる柔らかな慰めが、逆に罪悪感を増大させる。

「で、でも僕……沙苗さんの厚意を裏切るような真似を……」

母の親友であることも含め、沙苗は薫に格別な親愛を寄せてくれた。母性と包容力に溢れた年上の女性は、一人暮らしを始めた男子高校生の生活を優しく丁寧に後援してくれた。

そんな温和な熟女を相手に、牡の欲情を抱いていたのだ。優しさに付け込んだと糾弾されても何ら反論できない。

「えつと……それって、おちんちんを大きくしていたことに対して？」

「は、はい。そう、です」

ルージュに濡れた唇から前触れも無く男性器の俗称が紡がれ、思わず薫は声を上擦らせる。年相応の経験を重ねているためだろう。沙苗は特に恥ずかしがる様子もなく、ふわりと優しい笑顔を浮かべる。

「薫君は、私といてエッチな気分になったのが悪いことだと思っっているみたいだけ

タイトル

ど、それは違うわ。むしろ、とつても嬉しいのよ」

「嬉しい——ですか」

予想もしなかった答えに、薫は面を上げる。不可思議と困惑に苛まれた男子高校生に「ええ、そうよ」と童顔の熟女は領いた。

「だって、こんなおばさんに女としての魅力を感じてくれてるってことですもの。

おちんちんを勃たせてくれて、ありがとう——って言いたいくらい」

「そんな、おばさんだなんて」

年齢を鑑みれば沙苗のいうことは至極まともなのだろう。ただし、風貌が若すぎる熟女にはおばさんという呼び方は甚だ似合わない。

「沙苗さんは綺麗だし、先輩のお姉さんにしか見えないし——あつ」

薫にとつては自虐にしか聞こえない沙苗の自己評価を、美辞麗句ではなく本心で伝える。三十八歳の美熟女はくすりと微笑み、するりと薫の股間に指を這わせた。

「ふふ、ありがとう。お世辞だとわかっていても嬉しくなっちゃう」

「僕はお世辞なんて……うっ」

薫より一回り以上年上だが、薫よりも小さく繊細な掌。三十八歳とは到底思えない可憐な指先が、こんもりと膨らんだ股座をゆつくりと愛撫してくる。

成熟した女の柔らかさが布越しに男性器へと浸透した。たったそれだけで、腰の痺れる愉悅が男子高校生の背筋を貫く。

「こんな熱く、硬くなってくれたのね。嬉しいわ」

まるで子供の善行を褒めるように、丁寧な指使いで股間の膨らみが撫でられる。

そっと沙苗の身体が近づけられ、肩と肩が触れ合った。微かなウェーブのかかったセミロングの栗毛が、甘い香気を孕んで薫の二の腕に流れた。

（僕のちんぼを沙苗さんが撫でてくれるなんて）

母の親友という関係も影響していたためだろう。可愛らしさと色気を包含していた三十八歳に女としての魅力は感じて、それ以上卑猥な想像をすることを無意識に拒んでいた。

妄想すらしなかった片思い相手の母が、こうして現実に淫靡な愛撫を施してくれている。禁忌の淫夢が具現し、ボクサーパンツの中で抑圧された牡根が蠢く。

「沙苗、さん……お願い、止め——ううっ」

美熟女の愛撫は淫戯とはほど遠いソフトなものだ。男根へ直に触れているわけでもない。それなのに、与えられる快樂と込みあげてくる興奮は、目眩がするほどに濃厚だ。肉棒から発せられる淫熱は開放されることなく股間に燻り、卑猥な欲望が黒い炎

タイトル

を脳裏に灯す。

（このままじゃ射精しちゃう……早く、沙苗さんに止めて貰わないと）

降って湧いた淫蕩に浸りたいとする牡の渴望を、辛うじて理性が退ける。

何より、幾ら相手が美熟女とはいえ、直接陰茎を握られているわけでもないのに射精するなど、男としてのプライドが許さなかった。

「あっ、ごめんなさい。薫君が可愛い声上げるから、つい夢中になっちゃって……」
「いえ……気にしないで、ください」

股間を柔らかかに揉んでいた掌が、弾かれたように跳ね上がられる。官能の感覚が失われ肉欲が減退するが、着衣のまま精液を暴発させるといふ痴態は避けられた。

童貞だった頃ならまだしも、性行経験を経てから無様な射精をするのは嫌だった。

「さ、沙苗さんっ。何を——」

後ろ髪を引かれつつ安堵の吐息を漏らした薫だったが、ほんの一拍も保たずに新たな周章に見舞われる。

「ズボンの上から撫で撫でしているだけじゃ、焦らされて苦しいだけよね。気付くのが遅れてごめんなさい」

「い、いえ。そうじゃなくてっ」

繊細な指先がスライダーをそっと摘まみ上げる。そのままジッパーが開かれていこうとしたため、薫は慌てて叫んだ。

「あつ、ひよつとして、薫君は彼女がいるの？」

「い、いません……けれど……」

片思いの相手は沙苗の娘だが、その結花は彼氏持ちだ。馬鹿正直に話して同情されるのも惨めになるだけなので、薫は苦い嘘を吐くしかない。

「ああ、よかった。彼女がいるのにこんなことしたら、薫君が浮気したことになっちゃうものね」

薫に彼女がいたら二人の仲を乱すことになりかねないが、フリーならば問題がないというのが沙苗の倫理観らしい。そう言われてしまうと、薫としても返す言葉に難渋する。結花を想ってはいるが、性欲が溜まってむらむらすればオカズを用意してオナニーにも耽るので、殊更沙苗の申し出を固辞する理由にはならない。

否、三十八歳の美熟女からただの高校二年生が手淫を受けられるのなら、これは千載一遇のチャンスというべきだろう。

「でも……沙苗さんにこんなことしてもらうなんて」

それでも、躊躇は拭えない。沙苗は母の親友であり、結花の肉親であり、薫の大家

タイトル

でもある。何より、沙苗個人から薫は多大な恩恵を受けている。

そんな女性が自分の性欲を発散させてくれるなど、とても申し訳なく感じる。

「ふふ、薫君はとっても誠実な男の子だね。そうね……それなら、お詫びをして貰うって考え方をしてくれないかしら」

「お詫び……ですか？」

まさか謝罪すべき相手から詫びを申し入れられるとは思ってもみない。薫が当惑を隠せずにいると「そう、お詫び」と、沙苗が繰り返した。

「高校生の男の子を悶々とした気持ちにさせてしまったんですもの。他意は無かったとはいえ、煽るだけ煽って後は知らない——なんて、大人のすることじゃないわ」

「それは……そうかも、知れませんが」

薫としては蓄積した卑熱は自慰で発散すれば事足りるのだが、当事者である沙苗は責任を放棄するわけにいかないのだろう。納得することはできないが、言わんとしていうことは理解できる。

「それとも、薫君は私みたいなおばさんにおちんちん触られるの、嫌かしら」

「……嫌じゃ、ない……です」

幾つもの逡巡を嚙下し、薫は控えめな手淫を請う。こんな言い方をされれば、ま

もな性欲を持つ男子なら絶対に断れない。

(いや……逃げ道を塞がれたのかも)

見かけはとも若く幼げとはいえ、沙苗は三十八歳の美熟女だ。薫よりも一回り以上年齢は上だし、人生経験も豊富と来ている。

おまけに、優等生たる結花の母親なのだ。穏やかで優しい性格だが、頭の切れは見かけ以上に鋭くても何らおかしくは無い。

「ありがとう。ふふ、ちゃんと気持ちよくしてあげる」

薫を嵌めたこと。そして、それを薫に気付かれたことも見抜いていたのだろう。沙苗は小さく舌を出し、悪戯好きな少女のさながらに茶目つ気を垣間見せた。

「とっても熱くてカチカチになってるわ。窮屈な思いをさせちゃったのね」

ジッパーが開放されると、白く繊細な指先がするりとズボンの中へと侵入してくる。ボクサーパンツの表面に小さな指先が這い、牡の熱量を確かめるように掌をねつとりと揉み込む。

(ちんぽを触る手つきが、こんなエッチになるなんて)

かつての彼女達も薫の男性器に触れ、手を女性器に見立てて奉仕をしてくれた。

その際も自慰とは異なる心地良さに包まれたものだが、沙苗の手付きは質が異なる。

タイトル

男を悦ばせ、牡の情欲を搾るテクニクは、女子中学生だった彼女達とは比較にすらならない。左手で薄布越しに竿腹を撫でながら、焦らすようにゆつくりとボクサーパンツをずり下げていく。同時に、右手はベルトはバックルを緩ませ、ズボンの拘束感を緩めていった。

(可愛らしい沙苗さんが、こんな淫らな指使いをするなんて)

若々しい愛嬌を惜しげも無く振りまく、二人の娘の母には到底見えない未亡人。

この一ヶ月、そんな沙苗を見続けていただけに、性戯に長けた指使いは著しいギャップを生み出し、酷く背德的な興奮を男子高校生の下腹に疼かせる。

「それじゃ、おちんちんをズボンから出すわね——キャッ」

すべての枷が取り払われた瞬間、鬱屈の反動とばかりに肉樹が鋭く屹立する。男根の全容が晒されると、沙苗が小さな悲鳴をあげた。

「薫君……の、おちんちんよね。これ」

男子高校生の股間から生えた逸物から目を離すことなく、独白するようにはつりと沙苗が呟く。

(アンバランス、だよね。やっぱり)

やや複雑な心境を抱きつつ、薫は己の逸物へと視線を落とす。

自他共に認める女顔で、体躯もおよそ雄らしさからはかけ離れた細身だが、薫のペニスはまるで正反対な巨根だ。

包皮とは縁が無いずりりと剥かれた亀頭。ずんぐりと張られた肉厚の雁首。まだ高校二年生になったばかりだというのに肉竿は掌よりも長く、でつぷりと膨らんでいる。根元に吊り下げられた精囊はずしりと重く、たっぷりと子胤が詰まっているのが容易に計り知ることができる。

（せめてこの半分でも男らしさが体付きに反映されていれば、釣り合いも取れたんだと思うけれど）

牡としての成育要因がすべて生殖器にだけ流れ込んだような股間を見るたびに、薫は誇らしさと悲しさが交ぜになったコンプレックスを抱かずにはいられない。

（このちんぼで得をしたことって全然無いし）

野性味に溢れた外観は逞しく見栄えはするのだが、肝心のセックスにおいて有利に働いた例しがない。中学生の頃から平均を遙かに超えていた怒張は、処女を散らす際に痛苦で号泣されたし、破瓜の後も碌に快楽を与えられなかった。

薫の容姿とかけ離れたサイズだったこともあり、グロテスクだと評された時には少なからず精神に傷を負ったものだ。

タイトル

「可愛い薫君が、こんな立派なおちんちんを持っていたなんて……ふふ、ちよつとだけ驚いちちゃった」

結局、別れるまで戦々恐々とししかペニスに触れてくれなかった元・彼女達。

そんな女子中学生とは対象的に、沙苗は微塵も躊躇を見せずに剛棒へとたおやかな織手を伸ばす。欲熱を滾らせた陰茎に柔らかくひんやりとした指が絡みつき、新鮮な刺激に精囊がひくりと身震いした。

「あ、あの、沙苗さん。僕のちんぼ、気持ち悪く……ないですか」

「気持ち悪い？ どうして？」

陰茎に這わされていた指がぴたりと止まる。薫の言っている言葉が何一つ理解できないらしく、沙苗は不思議そうに小首を傾げた。

「僕、男らしくない体つきなのに、ちんぼだけは大きいから……その、中学生の頃にかかわれたことがあって……」

過去の傷を自らえぐり出したくはなかったので、若干事実を誤魔化すことで薫は己のコンプレックスを吐露する。手淫を止めた沙苗は静かに少年の述懐に耳を傾けていたが、やがて優しく微笑んだ。

「私もね、小学生の頃から胸が大きかったから、よく同級生の男の子達から囃したて

られていたの」

沙苗の言葉に促され、薫の視線が豊満な乳房へと吸い寄せられる。この美熟女は、性的に随分と早熟だったらしい。今ほどではないだろうが、相当に他の女子を引き離す大ききだったのだろう。薫も小学生の頃、一際バストが育った女子が体育の時間に目立っていたことを思い出す。

「けれど、中学高校って年齢を重ねていくうちに、この胸は男の子達を惹き付ける魅力へと変わっているって気付いたの」

「うっ、沙苗……さん……」

止まっていた女の指が、ゆったりと昇降を始める。直に肉茎に触れられ、むず痒い悦びが薫の腰へと流れこんだ。

「その子達はね、薫君がどれだけ魅力を秘めた男の子なのか、まだわからなかっただけ。大丈夫。このおちんちんは、とつても素敵なものよ」

自分に不釣り合いだと思っていた男性器が、経験豊富な大人の女性から褒め称えられる。自信を持ちきれなかった逸物が肯定され、牡のプライドに突き刺さっていた劣等感という名の棘が消えていく。

「ああ、沙苗さん……嬉しい、です……ううっ」

タイトル

性欲を搾り取ろうとするだけではなく、牡としての誇りを充溢させてくれた三十八歳へ、薫は喘ぎを堪えつつ感謝の意を示した。薫の意思とは別に、肉竿も悦びを興奮へと変え、鈴口から牡の淡精を漏れさせる。

「あらあら、おちんちんからエッチなおつゆが出てきたわ。ふふ、先っぽもばんばんに膨らんで、とつても可愛らしい」

「あ、うっ。沙苗さん……指、中になんて……ううっ」

未亡人が肉棒を抜く左手をつうと上昇させた。零れ落ちそうになっていた我慢汁が掬いあげられ、亀頭冠へと塗りたくられる。それだけでも強烈な快感が波濤となって腰を蕩かせるのに、女の人差し指が鈴口へと潜り込んでくる。

淡精の膜をかけられた鈴肉が、淫らな煌めきを放った。射精孔を内側から甘やかに穿られる快感に、これまで稚拙な手淫しか知らない十六歳は耐えられない。

男にしてはオクターブの高すぎる嬌声が紡がれ、防音性の高い室内にこだまする。

「おちんちんが大きいだけじゃなくて、精力もとつても旺盛みたいね。熱いネバネバが、こんなに沢山溢れてる」

「沙苗さんの手が気持ち良いから……ああっ」

亀頭全体を掌で撫で回され、発火せんばかりに沸き上がった快感に、薫の声が千切

れる。泡だった淡精が張り詰めた肉樹に塗りつけられ、摩擦が激減したところで筒を模した掌がずいゆりと昇降した。

牡の粘露に濡れた女の織手が、てらてらと下劣なぬめりを帯びる。

「薫君、もつと気持ちよくなって。私の手で、もつと喘いでいいのよ」

手淫を遅滞させることなく、沙苗がより女体を密着させる。沙苗が僅かに身体の向きを変えたことで、肩同士が並び合う程度だった接触は二の腕に乳房が押しつけられるまでに深みを増す。

桜唇から漏れ出る吐息が頬に感じられるまで、美熟女の顔が近づいた。コンディショナーの溶け込んだ甘く馨しい匂いが、薫の意識を微酔させる。

（沙苗さんのおっぱいがこんな近くに……ああ、触りたい。この巨乳を、思いつきり揉んでみたい）

思春期の欲望は果てが無い。年上の熟女に手淫を施され、腰が蕩ける快楽を甘受しているというのに、更に媚乳を揉みほぐしたい衝動が腹の底から沸き上がってくる。

理性が曇り、判断力が摩滅してきているため、もう遠慮も隠し立てもままならない。蒼い炎を宿した瞳が、じつと官能の双丘へと注がれる。

「おっぱい……触りたいの？」

タイトル

男子高校生の欲望を見透かす未亡人の指摘が、理性に纏わり付いていた朦朧とした靄を一気に吹き飛ばす。

「い、いえ……その……」

慌てて首ごと振って視線を逸らすものの、そんな真似をすれば沙苗の言が正鵠を射ていたと自ら認めるのに等しい。あまりに稚拙なミスを犯し、薫の頬が淫熱とは異なる恥辱の朱に染まる。

「いいのよ。触っても」

幻聴かと思わずにはいられない誘惑が、薫の心臓を一際強く高鳴らせる。

「薫君は、ずつとエッチな思いを我慢していたんですもの。これは、頑張り屋さんへの褒美」

手持ち無沙汰だった女の右手がすうと伸び、デコルテにそつと掌が乗せられる。人差し指が立てられ、乳房を覆っていたワンピースをほんの少しだけだけさせる。胸肌が大きく露出し、純白のブラが僅かに顔を覗かせた。

美熟女の幼げな双眸に、何処か蠱惑を感じさせる輝きが灯る。

「んっ……ああ……」

愛らしくも艶やかな誘惑に、薫の理性が骨抜きにされる。童顔の美熟女が放つ妖し

い色気に導かれ、豊熟した胸に自然と掌が吸い寄せられた。
沙苗が切ない吐息を漏らし、薫の耳朵を甘美に蕩かせる。

(これが…大人の女性のおっぱい)

ブラジャーが乳房をしっかりと守っているためだろう。ワンピース越しに感じる巨乳の感触は、硬くざらついた物であり、お世辞にも肌心地よい感触とはいえない。

しかし、ブラを撫でるだけでも、熟れ実った乳房は大きく形を変える。カップをほんの少し握れば押し上げられた乳肉が柔らかかに盛りあがり、左右に揺らせば魅惑の谷間は白く艶やかな波を打たせた。

「ん…それだけでいいの？ 服の上から弄っているだけで満足？」

優しく柔らかな沙苗のものとは思えない、ねっとりとした色を帯びた挑発。声自体に溶かし込まれた濃密なフェロモンが、薫の耳朵を犯して鼓膜を侵食してくる。

(これだけで満足できるわけない…もっと、沙苗さんの胸を触りたい)

牡としての欲求が懦弱だと言わんばかりの物言いに、本能が赫々たる獣熱を奮い立たせる。女のような顔立ちはしても自分は男だと誇示するべく、デコルテから直接ブラの中へと掌を潜り込ませた。

美しい球形を保っていた熟乳が、薫の粗暴な掌によって無残に崩れ去る。

タイトル

「あんっ…ふふ、大胆になったわね。男の子らしくて、素敵よ」

一瞬、熟れた肢体をびくりと跳ねさせた沙苗だが、年上の余裕を見せるように泰然と薫の蛮行を許してくれる。

(沙苗さんのおっぱい、こんな柔らかくてふわふわしてるなんて)

もっとも、当の薫には沙苗の賞賛など聞こえてはいない。初めて掌で味わう巨乳の感触。しっとりとして重く、それでいて艶やかな柔らかさを持つ童顔熟女の巨乳は、高校二年生に新しい感動を授けてくれる。

「んっ…あっ…もう、こんなに熱心におっぱい揉んで…そんなに、私のおっぱいが気持ちいい？」

「当たり前じゃないですか。想像していたよりもずっと柔らかくて、温かくて、心地よくて…ああ、ずっと揉んでいたくらいです」

乳肉を捏ねるようにして、丹念に揉み込む。時折、大きくずれたブラが乳首を擦ると、沙苗は「あんっ」と、牡の嗜虐心を煽る可愛らしい悲鳴をあげた。

へ体験版終了へ